

① 十日（とおか）ほどたつて、ごんが、弥助（やすけ）というお百姓の家の裏を通りかかりますと、その、いちじくの木のかげで、弥助の家内（かない）が、おはぐるをつけていました。

語彙的・文法的意味・構造

- ・十日ほどたつて⇨状況語的つきそい文（とき）
- ・ごんが⇨とおりがかりますと⇨状況語的つきそい文

（条件の形、発見）

\*今では、これ（後者）を状況語的つきそい文には位置づけられない  
いちじく⇨クワ科の落葉小高木。小アジア原産。高さ2〜4メートル。葉は互生し、大形で掌状に切れ込む。枝葉を切ると、

白色の乳液が出る。春から夏にかけて、葉腋に壺状の花序をつける。中に無数の白色小花がつくが、外から見えないので「無花果」と書かれる。果実は熟すと甘く食用。乾燥した茎葉・果実は緩下剤とされ、乳液はいぼ取り、生葉は殺虫などに利用。唐柿とうがき。

・おはぐる⇨歯を黒く染めること。かねつけ。また、歯を黒く染める。濃い茶色の液。江戸時代には、既婚婦人がつけた。

・通りかかる⇨通る+かかる

・おはぐるをつけていました⇨動作の継続

② 鍛冶屋（かじや）の新兵衛（しんべえ）の家のうらを通ると、「ふぶん、村に何かあるんだな」と、思いました。

新兵衛の家内が髪をすいていました。③ごんは、

・（ごんが）⇨通ると⇨状況語的つきそい文（条件）。

図書館に行くと、大山さんがいた（発見の条件）

・かみをすいていました⇨うごきのけいぞく

・かじ屋⇨金属をきたえて、器具を作るのを生業とする人。

・すく⇨髪の毛をくしでとかす。

・ふぶん⇨①相手を軽くあしらったり、あなどったりする気持ちをあらわす。②疑問・不平などの気持ちをあらわす。

指導の要領・留意点

・十日ほどたつて⇨いつからかを考えさせる。兵十にいたずらした日からであることをおさえておく。あの日のいたずらは、あとにかかり、大切である。

・ごんが⇨通りかかりますと⇨発見の条件の形であり、主文の弥助の家内がおはぐるをつけているのをごんは通りかかって見つけたのだ。

・そのの：かげで：いました。⇨木のかげでおはぐるをつけていたのであるから、ごんも、木の葉の間から、ちよつとだけ見えたのだろう。おはぐるは、毎日つけるものではない。ふだんの村の人たちの生活をよく知っているごんの注意をひいた。そして、ごんは、「あれっ」と思っているのだ。おはぐるは、毎日つけないこと、結婚した女の人がつけたことなどとおさえておくと、文②の「ふぶん：」が理解しやすい。

・ごんが⇨うらを通ると、⇨すていました

①の文と同様に、ごんは、新兵衛のうちのうらを通って、そこで家内が髪をといでいるのを見つけた。女の人が、おはぐるをつけたり、髪を洗って結び直したりと、毎日しないことをごんは知っている。ごんにとって、村の人々は、家族のようなものだ。それは、前にもあったが、⇨の家内と知っていることカラもわかる。

・ふぶん⇨ふぶん、ふんと比較して考えさせる。

ふうん⇨感心したり怪しんだりする気持ちをあらわす鼻声。

ふん⇨友だちや目下に対して承知した意。不満、軽蔑の気持ち。感心したり怪しんだりする気持ちをあらわす。

新兵衛のかないや弥助の家内のようなすから、村に何かあると気づくことは、ごんにとっては、簡単なことである。同じ日に、村の女の人がそろって、ふだんしないことをしている⇨村に何かある⇨ごんにはすぐわかった。

- ④「何（なん）だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」
- ⑤ こんなことを考えながらやってきましたと、いつの間（ま）にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。

- ・(ごんは)ーやってきますと⇨状況語的つきそい文 (条件の形)
- ・主語が省かれている。

- ・ごんは(主)ー来ました(述)。
- ・考えながら⇨副動詞、ついでにしている動き。

\*「ついで」というよりも、「同時性」の方が重要

- ・祭りなら⇨それが、祭りなら(条件の形)
- ・そう⇨①伝え聞いたことを表す ②予想して、今にもそうなるようすであることを表す。または、推量して、現在、そういうようすであることを表す。
- ・はず⇨形式名詞、ことが当然そうなることを表す。
- ・いつのまにか⇨独立語

- ・なんだろう〜今まで見たことから、「村に何かある。」と判断したごんは、何かの中身を考えている。

- ・秋祭りかな。祭りなら〜ごんは、具体的に何であるかを想像している。季節から考えて、秋祭りと思うのだが、おかしいな。
- ・たいこや…しそうなものだから。

お宮にのぼりが立つはずだが。

秋祭りなら、当然あるものがない。

- ・こんなこと〜ごんの考えた中身。秋祭りといって、秋祭りでない。たいこや笛の音、お宮ののぼり、
- ・いつのまにか…来ました。ー自分の考えに夢中で歩いていて。そして、気がついたら、兵十の家の前に来ていた。

⑥その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人があつまっていました。⑦よそいきの着物を着て、腰に手ぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。⑧大きなべの中では、何かぐずぐず煮えていました。

その 小さな こわれかけた  
家の中には ⇨ 状況語 (\*補語・ありか)

- ・よそ行きの着物⇨外出着。あらたまったときの着物。
- ・かまど⇨火を焚いて物を熱し、特に煮炊きする装置、道具。
- ・ぐずぐず⇨①はきはき行動しないで、ためらい、時間をとるさま。②不平などをはつきり言わないで、ぶつぶつ言うこと。
- ・ここでは、ぶつぶつ独り言を言うように音をたてて物が煮えたりしているようすである。
- ・くしたり⇨動きのならば

- ・その小さな…家ー 兵十の暮らしぶりがわかる。

- ・大勢の人ーふつうでないようすがはつきりわかる。

- ・よそいきの着物…手ぬぐいをーよそいきの着物を着て、仕事をしていること。表のかまどで火を焚いていることで、特別なことがあることを読みとらせる。

- ・考え事をしていたごんの目の前に、ふだんとちがう兵十の家のようすが広がった。

- ・こしに手ぬぐいを下げたりした女たちがー

- ・手ぬぐいを下げたりした女たちが

- ・手ぬぐいを下げた女たちが

比較して考えさせる。

- ・手ぬぐいをこしに下げただけではなく、ほかにもしていることがあるのだ。

⑨「ああ、葬式だ」と、ごんは思いました。

⑩「兵十の家のだれが死んだんだろう」

- ・ああ⇨(感) ①ものに感じたり嘆いたりするとき、発することば。②相手の尋ねたとおりだという意味で返事をし、また、承知するとき、発することば。③思いついたとき、呼びかけることば。 ここでは、3である。

あつ、葬式だ。ー突然気がついた。(見えた)

ああ、葬式だ。ーずっと疑問に思っていたことの考えが見つ

かった。

- ・ああ、葬式だーこれまでの経験で、こんなときは、葬式だとわかっている。

- ①②のことがらから、③④で、村で何かあるにちがいないが、それはなんだろうと疑問に思っていたごんは、⑥⑦⑧のことから、それが「葬式」であることを知った。

- ・葬式と知ったとき、ごんは、だれが死んだのか気がかりになっている。村人は、ごんにとって、身近な人なのだ。

⑪お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地藏さんのかげにかくれていました。⑫いいお天気で、遠く向うには、お城の屋根がわらが光っています。⑬墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさきつづいていました。⑭と、村の方から、カーン、カーン、と、かねが鳴ってきました。⑮葬式の出る合図です。

・お昼がすぎると＝状況語的つきそい文。条件の形。時間を表す。

・昼＝(体) ①朝から夕方までの間 ②正午 ③昼食

ここでは、③である。

・墓地＝(体) 死んだ人を葬つて墓を建てる場所。

・六地藏＝(1)六道において衆生の苦しみを救うという六種の地藏菩薩。すなわち、地獄道を救う檀陀だんだ、餓鬼道を救う宝珠、畜生道を救う宝印、修羅道を救う持地、人道を救う除蓋障、天道を救う日光の各地蔵の総称。また、延命・宝処

・宝手・持地・宝印手・堅固意の六地藏とする説もある。

(2)六体の地藏像を安置した寺。特に、京都伏見の大善寺の称。

(3)墓地や道ばたなどに六体を並べて安置した石の地藏像。

・かくれていました＝結果の状態

・いいお天気で＝いいお天気だの、中止めの形。原因、理由を表す。

・遠く向うには＝「くには」はありかをしめすに格のとりたて。次の「墓地には」と対になっていて、遠景と近景を描写している。

・光っています＝状態の持続

・彼岸花＝田の縁ふちや川岸に群生。秋の彼岸の頃、高さ約30センチメートルの花茎の頂に赤色の花を一〇個内外つける。花被片は六個で強くそり返り、雄しべは長く目立つ。花後、線状の葉が出、翌春枯れる。鱗茎りんけいには有毒だが薬用にする。曼珠沙華まんじゆしやげ

・くのように＝たとい。ひがん花が咲き続けているようすを、赤い布にたとえている。

・と＝すると、の意味である。

・かねが鳴ってきました。

かねが鳴りました。

葬式の出る合図が聞こえてきました。

・お昼がすぎると＝待っていたのである。待ちかまえていて、出かけていったことがわかる。

お昼がすぎてから、行こうよ

お昼がすぎると、行こうよ。

比較して、気持ちを考えさせるといい。

ごんは、兵十の家のようすから、葬式は、午後だと知っている。しかし、⑩の文と考え合わせて、ごんが、昼が過ぎるのを待ちかまえて、墓地にやってくるまで、六地藏の後ろにかくれている気持ちについて考えさせる。

・遠く向うには＝光っています。墓地には＝いました。

この二文は、情景描写である。どこからながめているのかというところ、遠くまで見える場所であり、「遠くには」に対して、「近くには」というところが「墓地には」となっていることから、墓地から見たということがわかる。遠くが見渡せることから、すこし高い場所であろう。いいお天気なので、遠くまで見え、おしろの屋根がわらが太陽の光をうけて、光って見えていたのだ。そして、近くへ目を移すと、墓地には、真っ赤な彼岸花が赤い布を広げたように、群れて、長く咲いていたのだ。この美しい光景を、早く来たごんは見ているのである。それは⑭「と、村の方から：」の「と」ではつきりする。

「すると」は、二つの動きをつなぐものである。ところが、⑭では、「くすると：した」のはなくて、：しただけあり、それは、「かねが鳴ってきました」である。そこで、前の文を見ると、情景描写しかない。そうすると、この文からわかることは、ごんが⑫⑬の風景に見とれていることが、書かれてはいないが、わかる。しかも、「すると」ではなく「と」とみじかいは、美しい景色にのんびり見とれていて、かねの音に、はっと自分が何をしにきたのか思いだしたのである。ここでの、美しいものに心をひかれるごんの優しさは、⑯の文に目が向いていることでもはつきりする。二次読みにかかるところであろう。

かねが鳴ってきました＝葬式の出る合図のかねが鳴ったのであるが、墓地にいるごんに、今か今かと待っている葬式の出る合図として聞こえているのである。